

# ラーニング・コミュニティと地域の連携による介護 予防（口腔機能低下予防）支援活動の試み

著者	関 道子, 堀 智子
雑誌名	京都光華女子大学京都光華女子大学短期大学部研究 紀要
号	59
ページ	121-131
発行年	2022-03-01
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1108/00001056/">http://id.nii.ac.jp/1108/00001056/</a>

# ラーニング・コミュニティと地域の連携による介護予防 (口腔機能低下予防) 支援活動の試み

関 道 子  
堀 智 子

【キーワード】 ラーニング・コミュニティ、地域連携、  
口腔機能低下予防

## 【要旨】

正課の授業時間外に教職員と学生が興味・関心のあるテーマについて協働学習する課外型ラーニング・コミュニティ(以下、LC)において、地域と連携して行っている介護予防(口腔機能低下予防)支援活動について報告し、その教育的効果と地域貢献の観点からみた意義を考察した。学生の振り返り(リフレクション)シートの記載の検証から、この活動は、言語聴覚士養成課程及び管理栄養士養成課程に在籍する学生にとって、協働性を軸とした能動的な学習態度の醸成等のLCの学びの利点に加え、専門教育におけるサービスラーニングの教育効果として、授業で獲得した知識の再確認と理解の深化、コミュニケーション能力の向上、志望する専門職の役割の再認識 が得られることが示唆された。また、介護予防サロン参加者や協働する地域のスタッフによる評価から、地域社会に対する効果や大学による地域貢献という側面においても意義があると考えられた。

## I はじめに

京都光華女子大学(以下、本学)では、課外型ラーニング・コミュニティ(Learning Community; 以下、LC)を設置し、正課の授業時間外に教職員と学生が興味・関心のあるテーマについて協働学習する活動を行っている。高等教育におけるLCは、人種的・民族的に多様な学生が増加した1980年代以降のアメリカで、在籍率やアウトカムの向上につながる手法として少人数グループで複数の科目を同時に履修し、正課および正課外で協働学習を行いながら学びを深める形式

をとったことがその起源であるとされている。LCの形態は、複数科目をリンクさせた科目連携型、1 Semesterあるいは1年を通じて展開されるコーディネーター型など、多様な類型がある<sup>1)</sup>。本邦では、2000年代後半以降、文部科学省中央教育審議会答申「学士課程教育の構築に向けて」(2008年)を受けて、カリキュラムや教育方法の改善が求められるなかで導入が始まったが、本学では、平成20年(2008年)度に文部科学省に採択された学生支援推進プログラム「学生個人を大切にしたい総合的支援の推進-エンロールメント・マネジメントと個別対応教育モデルの実践的融合」の取り組みの一つとして、課外型LC「学Booo(まなぶー)」が設置された。国内のLCの導入としては、先駆的事例のひとつとされる<sup>2)</sup>。

このLCの枠組みで、筆者は、地域における摂食嚥下障害者支援を学び、学生の立場で支援を行うことをテーマとして、2016年度に「KOKA ☆オレンジサポーターズ」を開設し、活動を継続的に行っている。参加メンバーは、現在までのところ、言語聴覚士養成課程、管理栄養士養成課程の学生で構成されている。発足当初は、1) 大学近隣の地域における認知症の方を含めた高齢者・障がい者の「食」を支援する取り組みを学ぶ 2) 地域で摂食嚥下障害者支援を行う「京滋摂食嚥下を考える会」の嚥下食プロジェクトの協力のもと、嚥下調整食としての和菓子開発に参加・提供する活動を含め学生の立場で地域での「食」支援に参加するの2つを主な活動内容としていた。2017年度からは近隣の介護予防自主グループにおける口腔機能低下予防支援活動への参画も開始した。さらに、2018年度からは、右京区地域介護予防推進センターと協働して、大学で介護予防(口腔機能低下予防)サロンを定期的に開催している。

この活動は、組織としてはLCの形態をとりながら、内容は、言語聴覚士或いは管理栄養士を目指す学生に

としてサービスマーケティング (Service-Learning; 以下、SL) の性質を有すると考えられる。SLは、文部科学省の大学教育改革に向けた2012年の答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」において、学生の主体的な学修を促す具体的な教育の在り方の一つとして提示され、「教育活動の一環として、一定の期間、地域のニーズ等を踏まえた社会奉仕活動を体験することによって、それまで知識として学んできたことを実際のサービス体験に活かし、また実際のサービス体験から自分の学問的取組みや進路について新たな視野を得る教育プログラム」と定義されている<sup>3)</sup>。また、SLはその実践的方法論に「リフレクション」を位置づけており、リフレクションによって、学生は自分自身の体験を振り返り、知識・情報を検証し、サービス体験前後の価値観の変容を再考し、自分が学習したことを将来の経験に発展的に応用できるようになると考えられている<sup>4)</sup>。

本稿では、当LCの5年間の活動の経過を報告し、学生の振り返り (リフレクション) シートの記載にみる教育的効果及び、地域貢献の観点からみた活動の意義と今後の課題について考察する。

## II 活動の概要

LC「KOKA ☆オレンジサポーターズ」の活動内容は、大きく分けると、以下の4つで構成される。

### ①高齢者向けの口腔機能低下予防の支援活動

- ・学内で実施 (介護予防サロン「KOKA ☆オレンジサロン」)
- ・学外に出張して実施 (出張型イベント)  
出張場所：障害者福祉サービス事業所、認知症対応型カフェ、デイサービス (診療所・

高齢者福祉施設)、介護予防自主グループ

### ②学生主体の勉強会の開催

③「安全に食べ続けることの啓蒙」(食支援)パンフレット作成

④嚥下調整食和菓子 (やわらか和菓子) の新商品の検討に参加

各年度の活動の概要を表1に示す。

LCを開設した2016年度は、地域の高齢者施設等に出向いて、提供されている食事やおやつの内容、食事場面を見学することによって摂食嚥下障害者支援の現状を知ること、施設において口腔機能低下予防を啓蒙するイベントを実施し、その中で嚥下調整食の和菓子を紹介・提供することを主な活動内容としていた。2017年度からは近隣の右京区地域介護予防推進センターとの連携が始まり、地域で活動されている介護予防の自主グループから依頼を受けて、出張型の口腔機能低下予防イベントを実施する機会が増加した。さらに、2018年度からは、地域介護予防推進センターで育成された介護予防サポーター (すこやか元気サポーター) の方々と協働して、大学で口腔機能低下予防を目的とした介護予防サロンを定期的に開催しており、以降は出張型の口腔機能低下予防イベントと大学での介護予防サロンの開催が、当LCの主要な活動となっている。(2020年2月以降はコロナ禍の影響により、出張イベントは休止中で、介護予防サロンは、開催の回数・形態が制限されている) 大学での介護予防サロンの開催案内は、本学地域連携推進センター及び右京区地域介護予防推進センターを通じて、近隣の地域住民に行っている。

出張型イベントでは、学生が主体となってプログラムを実施する。風船パレーや手遊び等の身体ほぐしの活動を行った後、呼吸・発声と嚥下体操、嚥下調整食

表1 活動の概要

年度	登録学生数	実施した活動
2016	22名	施設訪問6件 (見学4、イベント実施2)、嚥下調整食和菓子の講義受講等
2017	28名	施設訪問8件 (見学2、イベント実施6)、他の学Boooと合同の勉強会、食支援パンフレット作成等
2018	24名	施設訪問5件 (見学1、イベント実施4)、大学での介護予防サロン3回、上級生から下級生に向けた勉強会、食支援パンフレット作成等
2019	25名	施設訪問5件 (見学1、イベント実施4)、大学での介護予防サロン5回、上級生から下級生に向けた勉強会、食支援パンフレット作成等
2020	10名	施設訪問なし、介護予防サロン3回 (学外で実施/学生はリモート参加)、上級生から下級生に向けた勉強会、食支援パンフレット作成等

和菓子（やわらか和菓子）の紹介等を行う。介護予防サロンでは、はじめに介護予防サポーターの方々による運動と脳トレのプログラムが行われ、その後に専門職（本学教員、地域の作業療法士、歯科医師、管理栄養士等）によるミニレクチャー、続いて、学生による呼吸・発声と嚥下体操のプログラム等を実施する。休憩時間には、来場者と学生の交流も行っている。出張型イベント・介護予防サロンにおいて学生が担当する

役割は、会場の設営・イベントの司会・発声や口腔運動（嚥下体操）についての参加者への教示と実践・参加者との交流（会話）等である。出張型イベント・介護予防サロンの様子を図1・図2に、各回のミニレクチャーの内容を表2に示す。

当LCのその他の活動としては、上級生から下級生に向けた摂食嚥下についての勉強会の開催、出張型イベントや介護予防サロンで来場者に配布する食支援パ



図1 出張型イベント



図2 大学での介護予防サロン

表2 KOKA ☆オレンジサロン ミニレクチャーの内容

＜2018年度＞	タイトル	講師
2018年9月8日(土)	「食べる・飲み込むのしくみ」と「介護予防」のお話	言語聴覚士・作業療法士
2018年12月8日(土)	「発声・発音（パタカラ）」と「食べること」のお話	言語聴覚士
2019年3月2日(土)	「歯の健康」と「そしゃく（噛むこと）」のお話	歯科医師
＜2019年度＞		
2019年5月18日(土)	「フレイルってどんなこと？」	作業療法士
2019年7月20日(土)	「高齢者の聴こえとその対応」	言語聴覚士
2019年9月21日(土)	「お口の健康チェック」	歯科医師
2019年11月9日(土)	「食事で筋力をアップ！」	管理栄養士
2020年1月25日(土)	「飲み込みやすい食事の調理とは？」	管理栄養士
2020年3月14日(土)	*新型コロナウイルス感染拡大予防のため、中止	
＜2020年度＞		
2020年9月19日(土)	「コロナ禍でのフレイル対策！」	作業療法士
2020年11月14日(土)	「いつまでもおいしく食べるために～お口と喉の働きを保ちましょう！～」	言語聴覚士
2021年1月23日(土)	*新型コロナウイルス感染拡大予防のため、中止	
2021年3月13日(土)	「マスクとソーシャルディスタンス～それでも豊かにコミュニケーションしたい～」	言語聴覚士
＜2021年度＞		
2021年5月15日(土)	*新型コロナウイルス感染拡大予防のため、中止	
2021年7月10日(土)	「運動でフレイルを予防しましょう！」	作業療法士



ンフレット(図3)の制作を、毎年継続して行っている。嚥下調整食と菓子の新商品の検討は、コロナ禍の影響により、現在は行っていない。

LCとしての年間の活動回数は、月1回の定例ミーティング、イベント準備・リハーサルとイベント当日の参加、勉強会開催準備及び当日の参加など、合わせて約30回で、その他に学生は個々にイベントでのプレゼンテーションの準備や食支援パンフレットの作成準備等の活動を行っている。

### Ⅲ 教育的効果についての評価

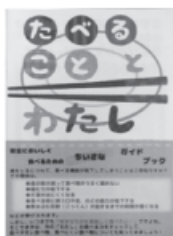
当LCの活動の教育的効果について、各回のイベントに参加した学生が事後に記載した振り返りシートの

記述内容、及び最終学年の参加学生を対象として行った活動の振り返りアンケートの結果をもとに評価を行った。

振り返りシート及びアンケートの記述内容は、匿名性を確保した形式でデータとして扱うことを説明し、倫理的配慮を行った。

#### 1. 振り返りシートと最終学年の活動振り返りアンケート

出張型イベント・介護予防サロンに参加した学生は、事後に振り返りのシートを記入する。振り返りのシートには項目は設けず、「感想、気づいたことなど、何でも書いてください」との指示にしたがって、自由記載を行った。また、最終学年の学生に対するアンケー



#### たべることわたし (2017年度)

- ・食べる力チェック
- ・のみこみクイズ たべにくいのはどれでしょう?
- ・食べ方の工夫/調理方法の工夫
- ・窒息時の対応



#### たべることわたし2 (2018年度)

- ・食べる姿勢チェック/姿勢を良くする体操
- ・あなたの「歯」をチェックしてみましよう/歯みがきのポイント
- ・食べ物の工夫/栄養面の工夫/よく噛むためのレシピ
- ・3分間嚥下体操



#### たべることわたし3 (2019年度)

- ・オーラルフレイルチェック
- ・呼吸の力を保ちましよう
- ・声のトレーニング/発音のトレーニング
- ・筋力upにおすすめの食べもの/おすすめレシピ



#### いつまでもおいしく食べるために 資料集 2020年度

- ・唾液腺マッサージとお口まわりの運動
- ・発音と歌でトレーニング
- ・摂食嚥下チェック
- ・飲み込みやすくする方法/飲み込みやすいお菓子のレシピ

図3 「安全に食べ続けることの啓蒙」パンフレットの内容

トでは、LCの活動全体の振り返りとして、参加したことで①摂食嚥下障害の理解が深まった②摂食嚥下障害支援の理解が深まった③食品の物性の理解が深まった④コミュニケーションの気づきがあったの4項目について5段階評価を行い、感想・気づいたことの自由記載を行った。

## 2. 振り返りシートの評価

学生の振り返りシートの記述内容について、長田らがBradley (1995)をもとに構成した3つのレベル(表3)に基づいて、評価を行った。この評価は、SLの分野で用いられているもので、レベル1は観察したこと・個人的な反省や感想の記載、レベル2は解釈や批判的な検討、レベル3は受け手に関する考察や解決策の検討などを評価の指標としている<sup>5)6)</sup>。

評価の対象は、2018年8月から2021年3月のイベントに参加した学生の振り返り、計80件で、参加回数が1回目、2回目、3回目以上の3つ群に分け、振り返り内容について3段階評価(L1、L2、L3)を行った。参加1回目の群は19件、2回目の群は21件、3回目以上の群は40件であった。図4に各群の3段階の評価の割合を示す。

参加1回目の振り返りでは、L1が全体の21.1%、L2が47.4%、L3が31.6%であった。参加2回目の振り返りでは、L1が全体の9.5%、L2が66.7%、L3が23.8%であった。参加3回目以上の振り返りでは、L1が全体の5.0%、L2が40.0%、L3が55.0%で、半数

以上がL3レベルの記述を行っていた。参加の回数が増すごとに、L1の割合は減少した。また、参加1回目、2回目に比して、3回目以上ではL3の割合が増加した。

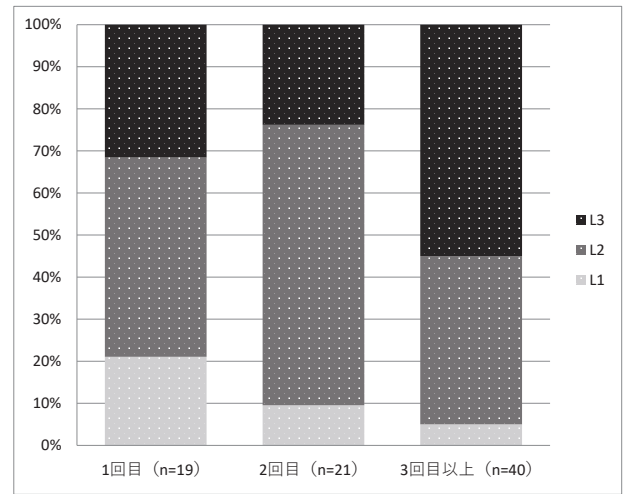


図4 リフレクションのレベル

ある学生の振り返りの記載の経過を表4に示す。1回目、2回目は自分の行動に対する内省が中心であったが、3回目以降は、それにプラスして「相手」に対する考察や課題の解決に向けた対応についての言及がみられるようになっている。

以上の結果から、活動に参加した学生は出張型イベント・介護予防サロンの参加回数が増えることにより、個人的な反省・感想のレベルから出来事に関する解釈や批判的検討へ、さらにサービスの受け手に関する考察や課題についての解決策の検討へと視点が変化し、

表3 振り返りシートの記述内容の評価

レベル	定義とその例
L1	・観察したこと、他者から聞いたことを単純に記述している
	・自らが活動した、感じたことを単純に記述している
	・個人的な反省や感想が記述されている
	例)「楽しく参加することができて良い経験になった」「体を動かす遊びが盛り上がった」
L2	・意味的な深まりを示す記述が含まれている
	・解釈を伴った記述が含まれている
	・批判的な検討が少しではあるが試みられている
	例)「自分から積極的に参加者さんたちと話しにいけない」「反応を見て動くということが少し意識できたのではないかと思う」
L3	・文脈に位置づけている、状況判断を含んでいるなど、多面的な記述がなされている
	・サービスの受け手に関する考察を含んでいる
	・課題の把握、解決策の検討などを含んでいる
	例)「発表をしたが、声が小さく参加者の方を学生が盛り上げられなかったので、次のサロンでは学生も主体的にできるようにしたい」「今回は感想をアンケートという形でとらせてもらったので会話の幅がいつもより広がったと思う」

表4 ある学生の振り返りの経過（振り返りシート記載例）

1回目	初めてのサロンで完成形が見えづらい状態でスタートしたため、不安が大きかったが、何とか終了できてよかった／見直したいところは段どり／コーナーのつなぎめの椅子の移動やコメント等、もう少しスムーズにしていきたい
2回目	前回よりも段取りがスムーズに行った部分は良かった／来てくださった方々と話すことや、話を盛り上げることが難しかったため、次の課題
3回目	スタッフが少人数のため、自分の役割を担うことが不安だった／大学でのサロンよりは段取りも内容も良くなったと思うが、もっと参加者の方々と交流できるような工夫をしたいと感じた
4回目	全体的な雰囲気明るく、良い雰囲気が作れたと思う／進行もスムーズだったが、自分の嚙下運動の説明は、参加者を巻き込むことができなかつたので、独りよがりとなってしまった
5回目	前回も嚙下体操を行ったが、聞こえが悪い方に聞こえづらいという意見をもらったので、今回は前よりスムーズにはっきりと話すことを心がけた。聞こえの悪い方への対応は、何度も経験していきたい。

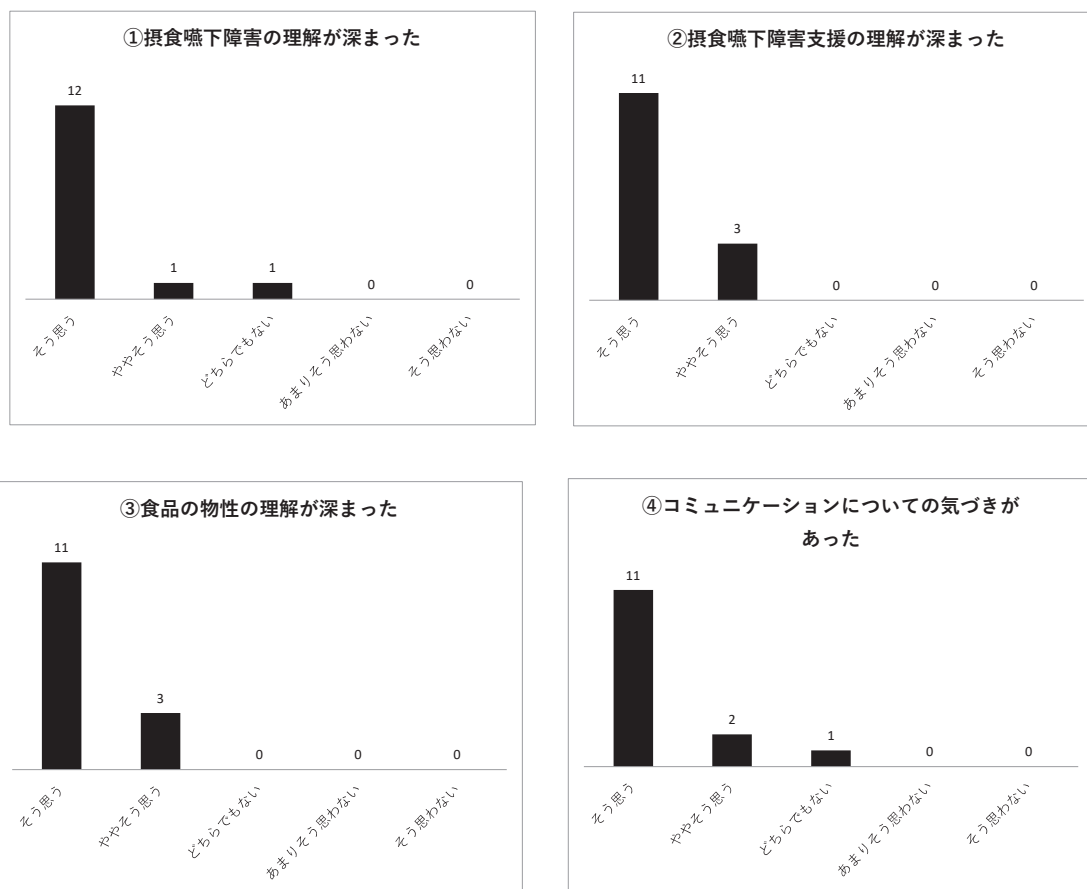


図5 最終学年の活動の振り返り (n=14)

記述内容のレベルに深まりがみられることが推察された。また、ある学生の振り返りの記載の経過の記述からは、参加の経験を積み重ねることで、自分の行動や気持ちだけでなく相手（サービスの受け手）に視点を向けて、より良いサービスを提供しようとする主体的な姿勢が生まれたことが観察された。

### 3. 最終学年の活動振り返りアンケートの結果

次に、2019年～2021年に、最終学年の学生を対象として行った活動の振り返りアンケートの結果を図5

に示す (n=14)。「摂食嚙下障害について理解が深まった」は、「そう思う」「ややそう思う」と回答した学生が14名中13名 (92.9%)、「摂食嚙下障害に対する支援について理解が深まった」「食品の物性についての理解が深まった」は、「そう思う」「ややそう思う」と回答した学生が、14名中14名であった。「コミュニケーションについての気づきがあった」の項目では、「そう思う」「ややそう思う」と回答した学生が、14名中13名 (92.2%) であった。

活動振り返りの自由記述の抜粋を表5に示す。

表5 最終学年の活動振り返り（アンケートの自由記載より抜粋）

授業では得られないことを経験し、言語聴覚士になりたいというモチベーションにつながった／多面的に物事が捉えられるようになった
言語聴覚士が他職種と連携して食形態を考えていくこと、地域の方との交流等様々なことを学ぶことができた
プレゼンテーションやパンフレット作りで違う学年・違う学科の人と協力し、意見を出し合うことで学生時代から他職種連携ができたことが将来に活かせる／高齢者に直接お話を聞き、食べることをどう思っているのか、ニーズがわかり、自分のなかでの考えが大きくなった
発表やパンフレット作成のために資料を作っていると、講義の復習にもなり、より頭に定着しやすい／イベントでの利用者さんとの交流は自分のコミュニケーションの反省にもなり、見直すきっかけとなった／場数を踏むことで、実習などへの安心材料にもなる／他団体の活動とも接点を持てたら面白いと思った
地域の方々と実際に交流する場を経験できた／高齢の方々が何に困っていて、どういう要望があるかといった生の声を聞き、どうそれに対応していくのか考えることがとても楽しく、特に、オレンジサロンは少しずつ改良しながら回数を重ねていけたように感じる／私は人前で話すことが苦手で、最初のころは前にいることが精一杯といった状況が、最後のころには以前より相手に伝えることを意識して望んでいたのではないかと感じている
授業とは違い、学外の人たちと交流することで自身への刺激になった／オレンジサポーターズで年代の異なる方との交流の機会を得ることができ、コミュニケーション力の糧となった／また、自身についての課題を見つけることもでき、成長に繋がったと思う／普段の座学で行う勉強とは違った方向から様々なことを学ぶことができた／同学年、同学科だけでなく、他学年、他学科との交流もでき、楽しく活動していたと感じる。
オレンジサロンや出張イベントを通し、多くの人と接したり講話を聞いたりすることで新しい学びや経験を深めることができた／自分の立ち振る舞いやコミュニケーションの取り方をどうすれば良いか分からず戸惑うこともあったが、同じ参加メンバーの行動を見習ったり先生のアドバイス等により少しずつ慣れていき、分かるようになった。サロンを重ねるごとに参加者同士、顔見知りになられて会話が弾んでおられたのでオレンジサロンは地域の人々の交流を深める上でも良い取り組みだと感じた。
オレンジサロンの活動を通して、男性女性を問わず、さまざまな年代の参加者とお話しすることが出来て、とても良い経験になった／普段関わることのない管理栄養士専攻の学生や、言語聴覚専攻の下級生と交流することができて新鮮だった／活動に参加することで、構音器官の運動や嚥下の知識を深めることができてよかった
普段関わることの少ない高齢者の方や下級生と話したり、分かりやすく説明したりする力がついたと思う／パンフレット作成にあたり自分で調べるが増えたので知識を得ることに繋がった

アンケートの結果からは、当 LC の活動全体を通して、摂食嚥下障害や食品の物性について、授業で学んだ内容の理解が深化すること、また摂食嚥下障害の支援についての理解が深化すること、自身のコミュニケーションの振り返りができることが示唆された。その他、自由記述の内容からは、地域の方々・他学科や学年の異なる学生など自分の普段属しているコミュニティ以外の人との交流の経験、他職種連携の実体験と目指す専門職の役割の認識、コミュニケーションの振り返りによる「伝え方」の改善、授業とは異なる角度からの学び等、学生にとってのプラスの効果が読みとれた。また、活動を楽しんで行うことで、能動的な学びのモチベーションが向上することが推察された。

#### IV 地域貢献についての評価

当 LC の活動の地域に対する貢献について、介護予防サロン参加者に対して行ったアンケート結果及び、協働する地域のスタッフへのヒアリング結果をもとに、評価を行った。

#### 1. 介護予防サロン参加者のアンケート結果（2019年度「オレンジサロン」アンケート集計）

2019年度に計5回行った介護予防サロンの参加者に対するアンケート（回収数131）の結果を、図6に示す。

来場者は70歳代が最も多く、70歳代と80歳代で全体の約80%を占めた。性別では女性が約70%であった。居住地は、大学が所在する右京区が90%以上であった。サロンの内容については、「たいへん興味ぶかい」「まあまあ興味もてる」を合わせると100%であった。

「大学でこのようなサロンを行うことについて、ご意見があればご自由にお書きください」と指示された自由記述では、「筋トレ、脳トレ、食事についてバランスよく教えていただいた」「発声と嚥下体操が勉強になった」等のプログラムについての感想や、「学生さんと一緒に勉強できて楽しい時間をありがとう」「学生さんと一緒に行うことで、楽しく若返った」等、学生の参加・学生との交流を楽しんでいる感想、「ほかの大学にはこのような講座がないので大変



## 参加者の概要

### <年齢>

記載なし	50歳未満	50歳代	60歳代	70歳代	80歳代
1	1	6	19	57	47

### <性別>

男性	女性	記載なし
39	91	1

### <居住地>

右京区	右京区以外	その他	記載なし
121	9	0	1

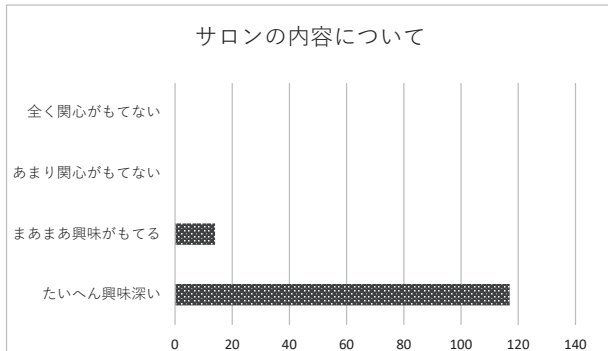


図6 介護予防サロン参加者のアンケート (n=131)

助かります」との大学での開催についての評価、「ずっと続けてほしい」「右京区だけでなく京都市内全域に発信して高齢者に知らせて欲しい」等の今後の開催についての期待等が記載された。

アンケートの結果から、介護予防サロンは大学の近隣からの来場者が圧倒的に多いこと、来場者は専門職による情報提供に興味を持って受け取っておられることが確認できた。また、自由記述からは、異なる世代である学生との交流を楽しんでおられること、サロンの継続的な開催が望まれていることが確認できた。

## 2. 協働する地域のスタッフによる評価

さらに、今回、本稿をまとめるにあたり、当LCと協働で介護予防サロンを開催していただいている、右京区地域介護予防推進センターの作業療法士1名と介護予防サポーター3名に対して、大学で介護予防サロンを開催することについて意見の聴取を行った。

### 1) 作業療法士のコメント

#### 大学でサロンを行うことの意義について

一般介護予防事業の拠点として、地域住民が主体となって運営する「通いの場」の活動を継続し、介護予防に資する活動とするためには、医療専門職の関わり

が重要だが、その専門職の数が少ない。また、区内に気軽に集まれる場所を探し、通いの場を運営するボランティアを養成することは容易ではない。そのような現状で、大学がサロンを開催し、場所、ボランティア(学生)、医療専門職を提供し、継続できていることに大きな意義がある。

#### 教育的効果について

これから医療専門職を志す学生が、現場に入る前に地域住民と関わることにより、「病」や「障害」だけを見るのではなく、お一人の人間としての「生活」「人生」を想像して関われる人材を育成する、大切な機会と考える。疾患の「予防」という観点を持って地域で活躍できる医療専門職が増えてほしいと考えているが、この活動はその素地となる。

## 2) 介護予防サポーターのコメント

#### 大学でサロンを開催することについて

- ・大学には専門の勉強をしている学生さんや先生がおり、そのような人たちが高齢者にわかりやすく教えてくれることが、とてもよいと思う。
- ・いつも集まる場所とちがって新鮮な気持ち。ありがたい。

#### 大学生と一緒にサロンを開催することについて

- ・知識を学ぶだけでなく、それをわかりやすく伝えることが大切。サロンでコミュニケーションの技術をみがいてほしい。そして将来、しっかりと「話が聞ける」医療職になってほしいと思う。
- ・若い人と話す機会がないので楽しい。一緒にサロンを行い交流ができてよかった。

#### 今後、大学に期待すること

- ・専門の勉強をわかりやすく教えてくれる講座やイベントを開催してほしい。
- 特に、高齢者が人様に頼るのではなく「自分で」元気になろうと思えるような講座を企画してほしい。
- ・これからもサロンを続けてほしい。
- ・地域住民向けにいろいろな講座を開催してほしい。学生さんが主体の取り組みもあればよい。将来どんなことをしたいか、話を聞いてみたい。

以上の内容から、大学での介護予防サロンの開催は、集まれる場所の提供、いつもと違う場所であるという刺激、ボランティアスタッフとしての学生の参加、高齢者(介護予防サポーター)と学生の協働の機会の提

供、医療専門職による口腔機能低下予防についての専門的情報の提供という点で、地域に貢献していると考えられた。

## V 考察

### 1. 課外型 LC の教育における利点

本学に LC が導入される以前に、アメリカの大学で LC の視察を行った本学の酒井(2009)の報告によると、多様な LC の運営形態のなかで、ほぼ共通する点は ① 1 つの LC が 15 人～ 25 人程度の少人数で構成される ② LC のメンバー間の協調学習を含む ③ 複数の科目をつなげて構成 の 3 点であったが<sup>7)</sup>、本学に導入された LC の形態は課外型で、③の特徴は有していない。課外型 LC が導入された経緯は、LC に類似するゼミ（1 年次から 4 年次）で学びの学生集団がすでに形成されていたこと、複数の科目を学んだ学生グループが領域横断的に特定テーマについて考えて発表する科目を選択科目で置く場合にカリキュラム運営が難しいこと、その一方で当時の本学では部活動・サークル活動が活発でなく、課外の位置づけで教職員が入って学びを活性化させるのが良いとの検討が行われた結果であり、大学の特色に見合った形態での導入であったと言える。

学生にとっての LC の利点について、酒井(2009)は、1) 能動的な学習（少人数制でメンバーどうしが協調しあう学習環境があると、学習への関与（engagement）を学生が高めやすくなる） 2) 多角的な学習（協調作業を通じて、議論、情報共有、連帯責任、タイムスケジュールの調整など、1 人で学習する場合には習得し得ない基礎学力を習得できる） 3) 人間関係の形成（少人数のコミュニティを形成しながら、共通の目的意識を持って学習するため、メンバーの性格、行動、好み、価値観などを理解できる）を挙げている<sup>7)</sup>。LC「KOKA ☆オレンジサポーターズ」の活動においても、少人数の集団によって協調的に学習或いは作業を行う機会を通して、1) 2) 3) の利点が観察された（表 4・5、図 4・5）。本学の課外型 LC 導入時の狙いの通り、学びの活性化がみられたと評価できる。具体的には、出張イベントや介護予防サロンでのプレゼンテーションの準備・実施やパンフレットの作成作業において、自分で調べるという能動的な学習や他のメンバーとの情報交

換・意見交換を活発に行うこと、スケジュールを調整しながら作業を行うこと等が、それらの利点を生み出すことにつながったと考えられる。

### 2. SL の視点からの評価

一方で、当 LC の活動は、地域社会へのサービス活動を行っている点において、SL の性質も有している。SL は、前述の文部科学省の答申に加えて、「大学改革実行プラン」「地（知）の拠点整備事業」（文部科学省 2012、2013）<sup>8) 9)</sup>において、知識伝達型の授業から学習者中心の知識構成型授業への移行に注力されるようになったこと、大学に地域貢献の機能が求められるようになったことが背景となり、近年では大学と地域社会をつなぐ教育実践の一つとして、各地の大学で導入されている。

中里(2015)によると、SL の実践例は、初年次教育や教養課程の一環として実践されるものと専門教育の一環として実践されるものに分類されるが、当 LC における SL の内容は、後者に類似している。中里は、専門教育における SL の効果を、教育的効果・地域社会に対する効果・大学全体としての効果 の 3 つに分けて述べており<sup>10)</sup>、その項目に沿って、検証を行いたい。

まず、教育的効果としては、1) 専門的スキルの獲得・授業で修得した知識の再確認 2) コミュニケーション能力の向上 3) 志望する専門職の役割の再認識 が挙げられている。専門教育の一環として行われている SL について、本邦では看護師養成課程での魚崎(2017)の実践報告があり、地域住民との直接的な接触による体験を積むことと、同時にその体験の意味づけを行うことによって学生の学修を深めることができた<sup>11)</sup>と考察されている<sup>11)</sup>。当 LC の SL においても、出張イベントや介護予防サロンのなかで地域住民に対して口腔機能低下予防のサービスを提供する経験によって、授業で獲得した知識の再確認ができ、理解が深化したこと、コミュニケーションの振り返りにより相手（サービスの受け手）に対する伝え方の技術が向上したこと、他職種を目指す学生との協働や地域のスタッフとの協働により、志望する専門職の役割が認識できたことが観察された（表 5・図 5）。

次に、地域社会に対するポジティブな効果としては、4) 学生が若い労働力として活動する 5) 地域住民自

身の地域理解がより深まる 6) 学生が地域に参入することで、新たな視点を獲得できる が挙げられている。当 LC の SL においても、協働した地域のスタッフに対するヒアリング結果から、学生がボランティアスタッフとして活動することや、異世代である学生とのコミュニケーションという、日常にはない「新鮮」な機会を提供する点で、4) と 6) の効果があったことが推察される。加えて、地域の高齢者に対しては、大学での介護予防サロン開催は、外出の機会を提供し、参加者同士や学生とのコミュニケーション機会を提供することが生活における刺激ともなり、口腔機能低下予防に加えて QOL の向上に資するという効果も見込まれる。

さらに、大学全体としての効果については、7) 地域貢献の役割を果たせる 8) 学生の学術的知識の獲得・汎用性能力の向上により大学教育の質保証を実現できる 9) 学生同士の日常的なサポート活動が促進される可能性がある が挙げられている。当 LC の活動も、7) 9) の点ではアンケート(図 6) や地域のスタッフのヒアリング結果、学生の記述から効果を確認することができたが、8) については、詳細な検証は実施できておらず、今後の課題である。専門職養成課程を有する大学の地域貢献のあり方として、大学が地域で「出かける場」の一つとして活用されることは、今後、大学が地域包括ケアに参画する形態の一つとなり得ると考えられる。

以上に加えて、中里(2015)は、SL の教育効果を促進する条件として「学生自身の活動目標の明確化」と「振り返り」を挙げている。SL ではリフレクション(振り返り)により、自分自身の体験を振り返り、知識・情報を検証し、サービス体験前後の価値観の変容を再考し、自分が学習したことを将来の経験に発展的に応用できることが倉本(2004)の先行研究によって示されている<sup>4)</sup>。当 LC の活動の経時的な振り返りにおいても、図 4 にみられたように、サービスの体験を積み重ねることによって視点の変化や広がりが見られ、受け手の立場に立った課題の検討や自分の行動の調節が行われて提供できるサービスがブラッシュアップされていく可能性が示唆された。学生の活動目標の明確化については、現在、導入を試行している段階である。

### 3. 今後の課題

当 LC の今後の課題としては、地域のニーズに沿った内容の活動の展開(プログラム構成)、介護予防サロンの来場者に対する効果の検証、学生の具体的な活動目標の設定とその評価およびフィードバック、コロナ禍で学生が課外活動に目を向けにくい状況での活動継続 が挙げられる。また、コロナ禍の影響とは別に、対人援助の専門職を志望しながらこのような活動に関心を寄せない、或いは参加をためらう学生をどのように導いていくか、という点も検討すべき課題である。

新たな活動内容としては、コロナ禍で外出機会が減少し、コミュニケーションの機会も乏しくなった独居高齢者との電話でのコミュニケーションを学生が行うこと等を、地域の社会福祉協議会との連携において構想中である。

## VI まとめ

課題型 LC での介護予防(口腔機能低下予防)支援活動は、協働性を軸とした LC の学びの利点とともに、専門教育における SL の教育的効果も得ることができると考えられる。また、専門職養成課程を有する大学にとって、地域貢献にもつながる点で意義があると考えられる。

今後も活動を継続し、地域への貢献とともに、学生の自発的な学習態度の醸成につなげたい。

本研究の倫理的配慮は京都光華女子大学研究倫理委員会による倫理審査の承認を受けた。(承認番号 131)

本報告に関して、開示すべき利益相反はありません。

謝辞：本学の LC 導入の経緯についてご教授いただきました、キャリア形成学科の酒井浩二先生に深謝申し上げます。

## 引用・参考文献

- 1) 五島敦子：ラーニング・コミュニティによるカリキュラムの再構築～教員の協働性を支えるために～ 人間関係研究(南山大学人間関係研究センター紀要), 13: 1-19, 2014
- 2) 五島敦子：日本の高等教育におけるラーニング・

コミュニティの動向 南山短期大学紀要第 38 号：  
111-131, 2010

- 3) 文部科学省「新たな未来を築くための大学教育の質転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」(答申) [https://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/shingi/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2012/10/04/1325048\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2012/10/04/1325048_1.pdf) (2021 年 8 月 18 日閲覧)
- 4) 倉本哲男：サービス・ラーニング (Service Learning) の授業構成因子に関する研究－「リフレクション」(Reflection) との関係性に着目して－ 日本教育方法学会紀要「教育方法学研究」第 30 巻 :59-70, 2005
- 5) 長田尚子、村田信之：サービス・ラーニングを手がかりとした職業実践的プロジェクトの展開：学生によるリフレクションの深化に注目した活動のデザインと評価 京都大学高等教育研究 (2011),17:39-51, 2011
- 6) Bradley, J. A model for evaluating student learning in academically based service. In M. Troppe (Ed.) Connecting cognition and action: Evaluation of student performance in service-learning courses (pp. 13-26), Providence, RI: Campus Compact (1995)
- 7) 酒井 浩二：米国の大学におけるラーニング・コミュニティの視察報告 日本教育工学会研究報告集 09 (2), 37-44, 2009
- 8) 文部科学省 (2012) 「大学改革実行プラン」  
[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/24/06/\\_icsFiles/afieldfile/2012/06/05/1312798\\_01\\_3.pdf](https://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/24/06/_icsFiles/afieldfile/2012/06/05/1312798_01_3.pdf) (2021 年 8 月 18 日閲覧)
- 9) 文部科学省 (2013) 「地 (知) の拠点整備事業」  
[https://www.mext.go.jp/a\\_menu/koutou/kaikaku/coc/](https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/kaikaku/coc/) (2021 年 8 月 18 日閲覧)
- 10) 中里陽子 吉村裕子 津曲隆：サービス・ラーニングの高等教育における位置づけとその教育効果を促進する条件について アドミネストレーション 第 22 回第 1 号, 164-181, 2015
- 11) 魚崎須美：サービス・ラーニングに注目した公衆衛生看護学実習の試み 兵庫医療大学紀要, Vol.5 No.2 17-21, 2017
- 12) 文部科学省「新たな未来を築くための大学教育の

質転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」(答申) 用語集 [https://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/shingi/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2012/10/04/1325048\\_3.pdf](https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2012/10/04/1325048_3.pdf) (2021 年 8 月 18 日閲覧)



